



校舎焼失間もない頃

昭和 20 年 6 月 29 日未明に B29 爆撃機 138 機による焼夷弾攻撃を受けた。当日は中間試験の初日。『一中一七会卒業 50 周年記念誌』には空襲の様子が多く書かれている。その中から要約させていただいた。昭和 17 年に入学した一七会の皆さんは当時 4 年生だった。

東中山下に住んでいた KS 君「足の弱い母の手を引きずるようにして県庁坂（当時の県庁は現天神山文化プラザのある場所）を駆け上がり、岡山神社の前を通過旭川の堤防の上に立った。鳥城は一中側から火を受けて中層部が炎上。たちまち猛火に包まれ中層部から折れるように一中側に崩れ落ちた。」

森下町に住んでいた TS 君「肺結核で動けない長兄を雨戸に乗せて、火の粉を避けようと逃げまどいながら、黒くそびえたつ鳥城を眺め、ああ、わが母校のあるお城は助かったと思った途端一気に燃え上がった。脱力感をぬぐうことができなかった。」

小畑町（現番町）に住んでいた KY 君「出石の通りから鉄橋の少し南の土手へ逃げた。赤い空にシルエットで浮かんだ鳥城の天守閣の窓という窓から紅蓮の炎がふき出していた。そして燃え上がったと思うと瞬時に崩れ落ちた。暫くの間、空襲も忘れて茫然と立ち尽くしていた。」

## 【国富校舎時代】

### 昭和 25 年（1950）～昭和 44 年（1969）

校舎焼失後、昭和 21 年末には、一中・二女ともに急ごしらえの校舎が完成し授業を再開。昭和 23 年の学制改革、昭和 24 年の学校再編を経て、同年 8 月 31 日両校は統合され岡山朝日高等学校となったが、実質的統合は昭和 25 年度からで、朝日高校第 1 期生である昭和 25 年卒は、「男女が席を並べることなく」卒業した。

第六高等学校の校地・校舎は、昭和 25 年 3 月に最

後の卒業生を送り出した後、使用されなくなった。25 年 8 月、国と県の間で契約が取り交わされ、朝日高校が「一時使用」することとなり、9 月 1 日、3 年生が机と椅子を持って相生橋を渡って六高跡地（国富校舎と呼ばれた現校地）へ移動した。教室の増築を受けて、昭和 27 年 9 月に 2 年生が、28 年 8 月に 1 年生が国富校舎へ移動した。

昭和 17 年 4 月 27 日創立の岡山県立岡山夜間中学（現岡山県立鳥城高等学校）とは、そ



昭和 36 年

の創立から平成 9 年 1 月に伊島町に移転するまでの 55 年間、同じ校地・校舎で学んでいた。



昭和 43 年夏旧本館

## 【階段校舎時代】

### 昭和 44 年（1969）6 月～平成 18 年（2006）12 月

昭和 30 年代に入ると、空襲で焼け残った基礎の上に急ごしらえて建てられた校舎の老朽化が急激に進み、新校舎建設に向けての陳情が活発化。昭和 40 年代に入るといくつかのマスタープランが作られた。そして東京大学工学部吉武研究室によってあの斬新な校舎がデザインされた。



平成 18 年 8 月

建設工事は昭和 43 年 4 月に始まる。教室棟の工事が昭和 44 年 3 月に完了。6 月には 1・2 年生が自分の机や椅子を新校舎へと運んだ。3 年生（昭和 45 年卒）は工事の振動と騒音に耐えながら、新校舎に足を踏み入れることなく卒業した。



昭和 55 年春